

春燈

2021 February

2月号



久保田万太郎の句

昔、男、しぐれ聞きく老いにけり

『流寓抄』昭和三十三年

句の前書に、本多直次郎を追懐すとある。本多は、小説の名主幹であった。長身で着物がよく似合い、立ち居に風情と艶があり、昔、男、の業平にどこか似た男に思いを馳せる。しかし晩年は、淋しく亡くなったという。しぐれを聞いたは、万太郎か、直次郎か、しぐれは、どこことなく華やきもあり、しみじみとした気分になる雨である。

三宅 文子

久保田万太郎の句

粉ぐすりのうぐひすいろの二月かな

『流寓抄以後』昭和三十八年

掲句には「病、やゝ快し」の前書がある。一読して、やわらかな調べに添った細やかな感情が迫ってくる。まだ二月であり、「うぐひすいろの二月」でもあり。回復しつつある病なればこそ希望の調べである。

「二月かな」に來し方へのしみじみとした心境がしのばれ心を打たれる。それはまた、対象から少し退いた余裕のようなものをも感じさせる。

平沢 恵子

安立公彦

真青なる総の天上木守柿

笹鳴や恬静の庭独り占む

月明の風をひとつに寒椿

朱は幸を呼ぶひと本の実千両

老いの身に誠の一字初日記



燈下集

○ 西川保子

ぼつかりと島を浮かべて瀬戸に冬

水軍の島隠したり冬の霧

枯蓮と同じ薄日を浴びぬたり

綿虫を見失ひたる目のやり場

残生という未知数や山眠る

○ 佐藤信子

落葉掃く逢はず忘れず過ぎし日々

日の温み抱いて真紅に冬薔薇

凧の残しし空の青さかな

面影は横顔ばかり冬帽子

女子学習院此処に在りきと帰り花

○ 山内四郎

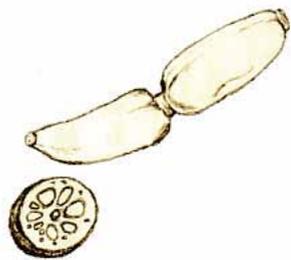
腕組みの目に眠る山遥かなり

天満山子どものやうに眠りをり

枯れ様を見せ道の辺の放棄田

稲刈りし頃の父よ針持つ母よ

珈琲を淹れて独りの冬の午後



○ 片桐てい女

蚯蚓鳴かす経済記者の熱さまし

俳人の眼指熱き藤袴

日が射せば霧のベールを脱ぎし風

霧脱げば道の色香の鮮しき

冬將軍湖上のボート脅かす

○ 園部 路郷

鮭番屋蘆でよろうて窓一つ
獣道ゆき舞茸にあたりけり
児の喧嘩通草の種を吹き飛ばし
一面の八千草を踏み釣場まで
鶏鳴に明るる牧場の霜だたみ

○ 松橋 利雄

積ん読に積み足す二冊神の留守
戸を閉めてよりの雨音文化の日
日溜りにこころほぐるる朴落葉
初しぐれ明かりの洩るる格子窓
かたはらの「春日暦」や年用意

○ 橘 正義

石路咲いて少し季節の移りけり
その色に惹かれて買ひぬ柿二つ
改めて山茶花の美を見つめけり
はつしぐれ両手に買物袋提げ
藤十郎讚へつつ秋惜しむかな

○ 三上 程子

木枯一号指を鳴らしてやつて来る
師の句碑につもる落葉はわれら弟子
くちびるの乾けば舐めて日向ぼこ
前の世も後の世もなき湯ざめ顔
埋火や役者くづれの独り言

○ 中野 あぐり

冬の日や黄粉をまぶす黍団子
太白を烟らせてゐるどんどかな
冬木立一本づつの刻移る
凜々と頬打つ風や二月尽
早梅に仏具磨きてをりしかな

○ 綱 徳女

柳散る銀座の角で行き逢へり
眠る子の頬ゆるみけり小春風
老舗継ぐ男の子たのもし七五三
愛込む手縫ひのマスクやや大き目
雑炊や甥に老身見舞はるる

○ 中村 嵐楓子

鯉跳んで跳んで暮色を深めけり
老いといふ島に流され賜日和
葛紅葉三代つづく医師の門
小春日の井戸で欠いたる茶碗かな
一本の枯木の眩しくてならぬ

○ 持田 信子

吊し柿見事な出来に心足る
布草履なじまぬままに冬に入る
母のごと迎へてくるる石路の花
コロナ禍や行先まよふ冬鷗
浦賀水道行き交ふ船の小春かな

○ 鷹崎 由未子

あるはずなき夫の足跡冬の浜
松籟に夫の声きく時雨かな
熟年の眉のかげりや冬紅葉
百円もどるコインロッカー 勤労感謝の日
枯葉舞ふ地に幸せのあるごとく

○ 平沢 恵子

小春日や頭皮の傷の抜糸あと
石路の花留守居の夫の無口なる
縁側の八手の花や父まろく
暮早しほると角煮のくづれけり
食ひ付けぬ本片隅に時雨かな

○ 宮崎 洋

龍太句集千草の風に開きけり
うれしかる言葉を留むる耳袋
つつがなくけふも済みたる石路の花
潮騒のたかぶる真昼三島の忌
冬の貨車人の想ひを塞き止めて

○ 中里 よし子

言ふことをきかぬ手足や冬ざるる
留守番だけの家居に鳴けり冬の虫
時雨るるや上毛三山見え隠れ
見納めの紅山茶花ぞ日に痛し
わが去りし後も咲き継げ冬の薔薇

○ 木村みどり

冬の川富士くつきりと映しけり
時雨るるや文字の薄るる翁句碑
立冬や蜂蜜多めのパンケーキ
駅小春太巻弁当よく売れて
柿落葉色とりどりや人もまた

○ 大西由美子

厨まだ睡りしままや今朝の冬
山茶花や校門前の文具店
冬ざれや一日諾ふ検査食
風呂吹の今日の機嫌の今日の色
足袋脱ぎて別れの未練断ちにけり

○ 池上昌子

金木犀路上流るる今朝の雨
城跡に見付けし蛇の穴に入る
庭木にも鶉鳴くや明けの空
秋草束ね友の優しさ届けらる
山茶花の咲きし古里今は無く

○ 近藤真啓

小春日やゴシック体で刷る原稿
日記買ふ雲ひとつなき好日に
極月や鉛筆の芯研ぎ澄ませ
灯火の消えぬ一窓寒北斗
五郎助の眼力に読む原著かな

○ 山下健治

炊きあがる土鍋の御飯文化の日
小春風窓のピノキオ踊り出す
冬の日の独り吟行波郷の忌
時雨きて芭蕉の句碑の昏きかな
任重き宇宙飛行士着ぶくれて

○ 小林紫乃

石放る十一月の水の音
佳き日和勤労感謝の日の孤独
四辻の信号待ちや初時雨
納豆の糸引き比べ朝御飯
纏ひくる冬の蚊おまへも寂しきや

○ 山下朝香

「無事は貴人」一軸をもて炉を開く
口切や丹波茶壺の緒の朱色
しみじみと朝の一服冬に入る
石路咲いて開け放たるる写経の間
小春日やふつくら焼くるパンケーキ

○ 佐俣まさを

冬麗や海光弾く檳榔樹
泥滴るつなぎの胸や蓮掘女
久闊を叙する湯宿や牡丹鍋
小春日や堆肥の山を切り崩し
濡縁に陽の柔らかし柿すだれ

○ 田中嘉信

公園の夜明けの匂ひ銀杏の実
コスモスの「はないちもんめ」に揺れにけり
小春日の瑠璃の煌めき奥多摩摩湖
時雨るるや沢音高き露天風呂
菰巻の縄目きりりと夕日影

○ 山浦紀子

干し物の取り込みうかと暮早し
長き夜や転べる犬をまた抱く
老犬の振り返り逝く秋の暮
外つ国ヘテルランプの霧に消ゆ
筑波嶺の尾根くつきりと冬はじめ

○ 室井津与志

木の空に鴉の凜と小六月
猿群れて味はひながら大根引く
コロナ禍の憂国論や冬に入る
風止みて雪のいちづに降り来たる
連峰に小春の雲の迷ひけり

○ 中上故子

若冲の群鶏の丹や秋の寺
茶の花や逢へぬ姉妹の長電話
石路の花懈怠の日々を過ごしをり
保津川へ傾れて深し紅葉谿
横綱不在なれど熱戦納場所

余言 安立公彦

面影は横顔ばかり冬帽子

佐藤 信子

「面影」、「横顔」、「冬帽子」、こうして並べると、夫それの言葉に趣と言うか、味わいのあることに気付く。同時に、冬帽子を被った面影が浮かぶ。横顔の面影である。俳句は十七文字で構成されているが、言葉の組合せによつては、一編の文学となることを、私たちはこの句によつて知り得ることが出来る。

この句は回想の一句だが、その回想を、右に挙げた三つの言葉から辿ることが出来る。静謐の内にかすかな哀愁のこもる横顔である。みごとな構成と言えよう。

太白を烟らせてゐるどんどこな

中野あぐり

「太白」は太白星、金星。地球のすぐ内側に軌道を持つ星。夕方西空に見える時は「宵の明星」、明け方東の空に見える時は「明けの明星」と呼ぶ。太白星。「どんど」は小正月、一月十五日の火祭の行事。左義長の呼び名で広く知られて

この句は、「今」があるから自らの髪の毛の表現と言えよう。俳諧味の効いた一句である。

久にとる万年筆や憂国忌

金山 雅江

「憂国忌」は三島由紀夫の忌日。昭和四十五年十一月二十五日、三島忌の傍題である。三島は東大卒業後大蔵省官吏となるが、間もなく同省を辞し作家となる。この日三島は「楯の会」の四人を引きつれ、市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監室に入り、陸将を椅子に括る。その後隊員約八百名を前に憂国の持論を述べ、総監室に戻り割腹自殺する。私はこの事件を、折しも社用の車中で聞いた。

この句「久にとる万年筆」と言う何気ない所作が、「憂国忌」と善く調和している。この「万年筆」は動かない。作者も三島由紀夫の愛読者の一人なのだろう。

あの頃の一途さ古書の高き嵩

宮田 豊子

「あの頃の一途さ」は、青年の頃のひたむきな思いを振り返りての回想と言えよう。本棚に富ます古書を見ていると、若い頃の向上心が無上に懐かしく思い浮かぶのである。この句を見て頷く人は多かるう。私も神田神保町の古書店街には良く行ったものだ。

この句を見ていると、そういう過ぎ去った日々を回想す

いる。正月の門松や注連縄などを燃やす。はるか以前常陸で見たどんど焼は壮観だった。

この句、その左義長の燃え立つ炎と太白星の取合せが実景を見るようだ。「烟らせてゐる」に共鳴する。

ゆつくりと言葉を捜し林檎むく

深川 敏子

「林檎」は晩秋の季語だが、師走の頃佳く店頭で見かける。「ゆつくりと言葉を捜し」は、句作にとつて必須のものである。この「ゆつくり」は「林檎むく」にも懸かる。紅色の林檎をむく作者の動きもまた「ゆつくりと」である。晩秋の季節感も日差しも、「言葉を捜し林檎むく」から導き出されて来る言葉だ。句作は愉しい。この句を見ていると、そういう思いが湧いて来る。

濡羽色を誇りしが今木の葉髪

青柳 雅子

毛髪即ち髪の毛は、毛根と毛幹から成り、毛根は毛嚢に包まれて真皮の内深く在り、栄養や毛幹の成長を司る、と辞書は述べる。毛根は毛髪の根の部分、毛幹はその外に納まる部分、とあるが、解説図を見ないと理解は出来かねる。「濡羽色」は、鳥の濡れ羽色、黒く青みのある艶やかな色、「木の葉髪」は、冬期の落葉に喩えた言葉。

る作者の姿が浮かんで来る。それは亦、作者の今日を成す勉強の大きな力となっているのである。

切干や日向の匂ふ祖母の膝

渡辺 若菜

「切干」は大根を細長くうすく切つて干したものだ。その切干の屋内の縁側には冬の日が一杯に射し、老いた祖母が座布団に坐り日向ぼこをしている。祖母の着物の膝は冬の日差しを受けて、優しくふくらんでいるかのようだ。作者はその景を見て、「日向の匂ふ」の言葉が浮かんできたのだろう。「祖母の膝」が生きている。「日向の匂ふ」も善い。窓の外には冬の日を一杯に受けて、切干が並んでいる。これは遠い日の、作者の思い出の景を詠んだ句とも取れる。

人声の明るき銀杏落葉かな

西岡 啓子

落葉の中でも、取分けその色の美しさ、その広がり的美しさは、銀杏落葉に如くは無い。作者は今街路樹の並木道に居る。午後の冬日の射す並木路。赤いてゆく人々の声にも明るさを感じる。足許の歩道は一面の銀杏落葉だ。

この句、「人声の明るき」が善い。一句のテーマが良く納まっている。歩いて行く人びとの姿も見えて来るようだ。「明るき」という写生も善く効いている。この句もまた、日常の一景である。正に俳句の世界と言えよう。

当月集

安立 公彦選



○ 農野憲一郎

けあらしにゆるりと起動漁り船
大根干す風来る方に竿架けて
手の届く範囲の炬燵暮しかな
姉うたふ聖歌を母ぞ嘉すらむ
寒雀餌付く六畳一間かな

○ 横山さくら

あの歌と思うて聞くや冬の午後
迷うてもいつも同じやおでん種
善き先へ転がりてをり毛糸玉
こだはりを擦り合はせつつ年用意
つま先を照らす光や春隣

○ 秋山 葛

嵐去り山紫に秋寂ぶる
足早に子に会ひに行く秋の暮
しやぶしやぶに眼居奔る夕時雨
大桶の根方乾くや夕時雨
音もなく曇を濡らす小夜時雨

○ 佐藤まさ子

菜園に残る秋茄子黒光り
庄屋敷昔のままや木守柿
麦の芽の育つ農園朝ぼらけ
マスクして会釈を交はす繁華街
久に会ふ友と見上ぐる寒桜

○ 宮崎 紗 伎

しみじみとひとりのおでん辛子利く
野辺送り寒風に耳吹かれつつ
母の忌のいくたび来ても冬の川
赤貝のむき身とろりと冬日さす
ひと病めば気弱くなりぬ霜の菊

春燈の句

安立 公彦選



兵庫 片井 久子

皇室の悠久至宝展ゆ秋
宝物の子等の未来や読書の秋
苦の時や忍耐努力と冬の薔薇
懇ろの写真店閉づ蔦枯るる

京都 小西みさを

落暉追ふ佐渡に過客の我や秋
諍はぬと決めて解くや懐手
乾杯もて友を赦すや冬ぬくし
冬浅し親子渡船の波がしら

岐阜 高井 修一

凛として冬木の桜時をまつ
肅々と明日へ育む冬木の芽
メモを取りメモを忘るる小六月
雨垂れの物憂き音や囲炉裏端

京都 西村 洋平

溝蕎麦や小さき淵の暮れやすく
吊し柿夕日のぬくみなほ残り
北窓の足踏ミン雁渡る
山茶花の散りてはつばみ開きけり

福井 西本 花音

靴底に弾くる木の実山路ゆく
久に訪ふ本屋はカフェに冬ぬくし
寒灯下八掛の色ちらと見え
極月や暮れゆくを見る越の海
喜寿過ぎのスマホデビューや今朝の秋
爽やかにマスク外して深呼吸
小春日や作り置きする箸休め
気の重き喪中葉書や霜月来

岡山 重実ひとみ

東京 松本ゆきえ

予告なく駅にピアノや文化の日
厄介な我に手を焼く暮秋かな
ずれてゐる会話気にせず日向ぼこ
「よごしよ」て言葉まじぶ出る寒き朝

京都 大槻 祐二

遣り残しあるぞとばかり帰り花
濡れそぼつ磴百段の散紅葉
木を倒す音を呑み込む雪の山
瀬の石にネオンをうつす冬の川